

7. 躍進・量的、質的变化に対応する神戸税関



自動車工業 (広島・マツダ(株) 本社工場)

我が国の経済は、昭和20年代の復興の時代から、30年代は一転して高度成長の時代に入った。昭和30年後半の神武景気、昭和33年後半からの岩戸景気、さらには、昭和41年のいざなぎ景気を経て、我が国は自由世界第2位の経済大国に成長した。

この間の高度成長は、我が国産業の急速な重工業化がもたらしたもので神戸税関管内においても水島港、福山港等で鉄鋼、造船、石油化学等の工場進出が相次ぎ、瀬戸内工業地帯を中心にめざましい躍進を遂げた。

その後、我が国経済は、昭和48年の変動相場制移行に伴う円高、それに引き続く第一次石油ショックを契機として低成長時代を迎え、さらに、第二次石油ショック、あるいは、波状的に押し寄せる円高といった厳しい経済情勢を経て今日に至っている。

このような我が国経済の成長・発展とともに貿易も大きく伸長し、特に神戸港においては、昭和30年代から40年代にかけて繊維製品等を中心とした輸出と産業用機械類、小麦、バナナ等食料品の輸入が目立ち、地方港では、木材、鉄鉱石等の輸入と船舶、鉄鋼、自動車等の輸出が盛んとなった。

輸出入貨物の増大と多様化は、輸送形態の変革と船舶の大型化、専用船化をもたらし、さらに、輸送コスト低減への要請は、コンテナ輸送の進展をもたらした。このような情勢に対応するため神戸港では、新港第7・8突堤、東部第3・4工区、兵庫第3突堤、摩耶埠頭が建設され、港湾の近代化が進められた。特に、昭和42年から始まったコンテナ輸送の進捗は著しく、ポートアイランドの建設により神戸港は世界有数のコンテナポートへと飛躍した。

一方、貿易の増大に伴う税関事務量の激増と輸出入貨物の多様化、複雑化に対処するため、当関では、税関支署、出張所の新設、輸出入通関部門の商品別編成等組織の整備、拡充と電動計算機、輸出入許可書等作成のためのコピー機の導入等税関業務の簡素化、能率化が強力に進められることとなった。この税関近代化は、その後、申告納税制度、輸出入申告の一人一貫処理体制、コンピューターの導入と新制度の採用、機械化など業務の合理化へ進展してゆくのである。

このように、税関を取り巻く環境は、量的、質的にも著しく変化しているが、当関においては、これらの変化に即応して適正かつ迅速な通関を確保するため、努力を続けている。